2021/07発行

目のまど April 2021

動物の眼科で緊急といえば、深層性角膜潰瘍、そして緑内障です。どちらも進行すると視覚を失う可能性があるため、眼圧計で高い数値が出ると、緊張感が高まります。

WRITED BY Rie Nishitani

犬の緑内障（2）治療編

犬の緑内障の治療は、視覚がある場合とない場合で大きく異なります。要は、視覚があれば視覚の温存、視覚がなければ痛みや不快感の解消が目的となります。残念なことに、緑内障と診断した時点で視覚を失ってしまっているケースが多いのが実情です。

そのため、初期症状の段階で異変に気づき受診するのはとても重要です（2021年4月号参照）。なぜなら、犬では眼圧が高い状態が72時間持続すると9割の動物が失明してしまうのです。視覚がある状態で緑内障が見つかった場合は緊急治療を行います。

大事なことは、早期発見が大事であること。また完治しない病気のため、どのように緑内障と付き合っていくかを考えていくことが重要です。

“見える“を守る治療

緑内障点眼薬

眼房水の排出を促す点眼薬です

犬の緑内障では点眼薬での生涯的な管理はできません。最終的には外科治療が必要になります。

点滴とその他の点眼

眼圧低下が不十分な場合、利尿剤の投与などを行ないます

注射の利尿薬

手術

現在一番に推奨されているシャント術は、眼房水の逃げ道を作って、眼圧の上昇を防ぎます。

シャント手術

毛様体凝固術

マイクロパルス光凝固装置（まだ北海道で導入されていません）

眼房水を産生する毛様体を光やレーザーで破壊する手術です。

“痛み“から解放する治療

視覚がない目でも、眼圧の上昇による痛みや、角膜障害が見られます。生活の質を改善させるために、外科手術が必要となるケースが多いです。

眼内シリコンボール移植術

眼球摘出術

硝子体内ゲンタマイシン注入術

眼房水を産生する毛様体を、ゲンタマイシンという抗菌薬を眼球内に注入して破壊する手術です。